

アドボカシーとしての未来史の取組 (まちなか大学院の試行)

The History of the Future as Advocacy Works (Trials by Machi-Naka-Daigakuin, ie Downtown Graduate School)

○正 佐藤 建吉^{*1}
Kenkichi SATO^{*1}

^{*1} 一般社団法人洗楓座 GIA Kofuza

The author proposes and attempts to popularize the concept of "history of the future". This paper is the third report, and describes about the relationship between "advocacy" and "Graduate School of Downtown". Our lives are based on the society of science and technology, *i.e.*, "technological conjunction". In the society, especially in the application and operation of large-scale science and technology, we must take collective responsibility. That ethics is "ecoethica." In this article, it is introduced that the author's organization of "Graduate School of Downtown" is challenging against the current issues with the eyes of "history of the future", and is also working as an advocacy for unexplored technologies, through conjugating with other organizations, in order to leave a foundation for the future.

Key Words : Science and Technology, Technological Conjunction, Advocacy, Unexplored Technology

1. 緒 言

「未来史」という概念を連続して取り上げている^{1,2)}。第3報としての今回は、未来史の活動が、行政や組織の取組に反映させるアドボカシーとして結実させることの意味や効果について述べる。その重要性を未踏技術における例として紹介する。日本の海外からの遅れや孤独感からの脱却、あるいは先進性をつくり出すにも未来史が必要であるとして論考したい^{3,4)}。

私たちの現代の暮らしは、科学技術との関わらないことは考えられず、多くは科学技術を前提として行われている。こうした現状を捉え、哲学者の今道友信（1922年11月19日 - 2012年10月13日）は、<自然>が環境であると同じように、<科学技術>も環境の一つであるとし、科学技術主導の社会を「技術連関」（＝科学技術連関）と形容し、かつ述語とした。その言葉はフランス語で"conjunction technologique"と初出され、世界で翻訳され広まっている⁵⁾。

科学技術は、ますます巨大化している。そうした科学技術の適用や担い手としては、国家の政府や自治体、また企業や法人などがあげられ、大資本や権利を得て実行・実践されている。そうした政策や戦略などの、方針決定や事業計画、その実践・運用、あるいは転換や革新、さらには終息や事後処理など、多くの局面での判断や裁量においては、経済や経営ばかりでなく、社会的責任を勘案して行われなければならない。

技術連関ならではの判断や裁量の局面においては、個人の倫理観よりは集団としての倫理観が問われる。なぜなら、技術連関社会においては、科学技術は、上述したように組織や集団によって提供・主導され、そして川下や川中である社会で受動される。こうした状況を捉え、同じく今道友信は、「エコエティカ」（生圏倫理学）という技術連関社会における倫理学を掲げ、その必要性を説いた⁶⁻⁸⁾。

今道は、すでに鬼界に身を隠したが、著書や講演録などにより、その視点や分析について知ることが出来る。筆者は、現時においてますます今道の遺した「技術連関」としての社会観の重要性、同時に「エコエティカ」としての倫理観の重要性を認識している。

筆者は、大学を定年退職後、地域での活動を主体としている。最初に行ったのが、廃校となった小学校でのエコフューチャーセンターとしての活動であった。それは、地域の活力の減退が慢性化し、あきらめの気持ちがまん延する風潮にあった地元に進んだ田舎をという企画であった。いわゆる東京一極集中により、少子化や高齢化が進行し、ローカル鉄道の経営困難という現象が先行した。電車の乗客数が減少し、収入と活力が減退した。

こうした地方では、現実と理想におけるギャップが大きく、それが課題である。それを放置するのではなく、そのギャップをなくし、現実を理想と一致させることが必要である。そのギャップをなくすること、つまり課題解決は、現実の中にいる地元住民(市民)が行わなければならない。その解決策になるのがアドボカシー(advocacy)と呼ばれるカタカナの言葉であり概念である。それを、純粋な日本語にしなければならない

2. アドボカシーとは

上述したアドボカシーについて深めたい。冒頭に述べたように、私たちの暮らし、そしてその舞台である社会は、科学技術を環境とし、しかも巨大な勢力をもって行われている。ゆえに、「エコエティカ」の必要性が提唱され、集団の倫理学を常識としなければならない。しかし、個人の力や意見は、民主主義の社会では大事な理念である。相対的に弱くなってしまっている個人の意見を広く市民の声として代弁する人や団体が求められる。

じつは、市民の声を、国や自治体の行政や大企業などの川上の組織に伝えることこそが、「アドボカシー」である。英語の advocate は、代弁者や唱導者という名詞でもあり、代弁するや唱導するという動詞でもある。名詞であることを明確にしているのが advocator である。また advocacy も名詞であるが、弁護や支持、鼓吹や唱道、そして援護や擁護などの意味があり、より積極的な活動を示す言葉であり、日本語では「アドボカシー」とされている。

さて、「アドボカシー」を、専門的に定義すると、次のようになる⁹⁾。すなわち、「公共政策や世論、人々の意識や行動などに一定の影響を与えるために政府や社会に対して行われる団体の働きかけ」である。具体的には、議員や行政機関への直接的ロビイング、デモ、署名活動などのグラスルーツロビイング、メディアへのアピール、啓発・世論形成、他団体との連合形成、裁判闘争といった活動形態を指すという。これらから、advocacy は「政策提言」という訳が用いられたりすることもある。

団体活動の担い手の、ある NPO では、「社会課題を解決するために社会に働きかけこと」としている。筆者もこの定義には同感であり、本稿もこの趣旨でまとめた。本論文の主旨は、未来を意識して、現在活動すべきテーマと方法を規定することで、何年か経過したのちには「未来史」となる。

3. まちなか大学院

筆者の組織である一般社団法人洗楓座は、多くの社会課題を解決することを目的に掲げている。定款には以下のように表現しており、範囲や対象は広い。「・・・自然エネルギーやその他の地域資源を活用した豊かで美しく、誇りある地域社会を創成し維持する、ひと・もの・こと、そして時間と空間を創造し、もって自然や環境の保護・整備、国土の利用・整備・保全、地域社会の健全な発展及び国民生活に不可欠な食やエネルギー等の安定供給の確保等に寄与することを目的・・・」¹⁰⁾。

洗楓座としてこれまで行ってきたある方面の活動に統一した視点と体系を整えるために、2020年12月に地域活性化センターの助成を受け、「まちなか大学院」という切り口の発会式を東京の学士会館で行った¹¹⁾(図1)。まちなか大学院という名前は、「まちなか大学」とは異なり、こだわりを持つ。すなわち、単なる講演会を行うだけでなく、社会の、そして世間の、さらに言えば地域の暮らしの課題を、講演会であればその参加者とその講師とが共に、解決していく機会をつくることをねらいとしている。すなわち、参加者にも問題意識をもって参加していただくようにしている。

その発会式では、三つのまちなか大学院を掲げた。新橋まちなか大学院(本部)と上総まちなか大学院(支部)と軽井沢まちなか大学院(支部)である。大学院には、学長がいるので名誉学長には千葉大学の元学長の古在豊樹、学長には東京農業大学の宮林茂樹元教授に就任していただいた。筆者が理事長である。

まちなか大学院で行った行事には以下のようなものがある。

令和3年度地域づくり団体活動支援事業

公開勉強会
まちなか大学院 事業
 2021年12月14日(火) 12:30~15:30
 学生会館/302室 (コロナ対策につき定員20名まで)
 アクセス/東京都千代田区神田錦町3-28/TEL.03-3292-5936
<https://www.gakushikanen.jp/access/>

(22世紀をデザインする)
 12:30~13:20 ランチタイム
 13:30~13:35 オープニング
 13:35~13:50 プロローグ/佐藤隆吉
 13:50~14:20 講演/植物工場の未来 古在豊樹/名誉学長
 14:20~14:50 講演/多摩川環境大学の実践 豊林茂幸/学長
 14:50~15:20 ティスカッション/イトーノリヒサ
 15:20~15:30 エピローグ/クロージング

第3の集場所
 ココ・フューチャー・センター

まちなか大学院
 アドボカシー
 できる状況づくり

新橋まちなか大学院
 まちなか大学院
 まちなか大学院
 上総まちなか大学院
 連携先/フーズフリー

主催：一般社団法人 沈風館 / 〒105-0004 東京都港区新橋1-5-5 国際音楽会館4B
 連絡先: kofuza@gmail.com / 090-1268-5882 / <http://www.kofuza.jp/html/event.html>

Fig.1 Dounton Graduate School

11 2019年(令和元年)8月5日 新エネルギー新聞 第137号

④の新橋まちなか大学院の会場風景と佐藤隆吉氏

「ふるさと Something NEWS」第14回

新橋まちなか大学院は、SDGsなり
 未来のためのシルバー・デモクラシー

一般社団法人 沈風館
 代表理事 佐藤隆吉

「ふるさと Something NEWS」第14回は、このテーマで、新橋まちなか大学院の会場風景と佐藤隆吉氏を特集した。記事には、講演の様子や、会場での交流の様子が写真とともに見られる。また、新橋まちなか大学院の活動内容や、SDGsとの関係についても詳しく紹介されている。

Fig.2 SDGS, Shimbashi Downtown Graduate School

(1)新橋まちなか大学院の取組 (図2)

- 第1回『地域紙で "ふるさと快活" をめざす』2019.2.1 (金)
- 第2回『北欧デンマークの暮らしと自然エネルギー利用』2019.4.5 (金)
- 第3回『奈良少年刑務所での絵本と詩の教室のエフェクト』2019.6.24 (Mon)
- 第4回 未来のためのシルバー・デモクラシー講座『再生可能エネルギー社会を孫にのこす』2019.7.8 (Mon)
- ワークショップ『富澤きららの夏休み親子マンガ描き方教室』2019.8.10 (Sat)
- 河合弘之弁護士企画製作映画「日本人の忘れもの」上映会@東京ウイメンズプラザ 2020.10.9 (金)

(2)上総まちなか大学院の取組 (図3)

それより1年前の2021年は3・11の2011年から10年目の年に当たり、上総まちなか大学院では、「過現未<過去・現在・未来>による防災対策」を毎11日に12月まで行った。その内容は以下のとおりである。

- ①3.11/《過現未》キックオフ・イベント@太東埼灯台広場
 - ②4.11/《過去》過去から学ぶ・・・究極の安全&防災対策とは？!
 - ③5.11/《現在》「フェーズフリーとは？」
 - ④6.11/《未来》「森の防波堤が守ってくれる
 - ⑤7.11/《過去》「展望室&FM局付き発電風車」
 - ⑥8.11/《現在》「フェーズフリーと防災食」
 - ⑦9.11/《未来》「森の防波堤の可能性(FS)」&討論
 - ⑧10.11/《過去》「洋上風力発電と産業の10次化」
 - ⑨11.11/《現在》「身近な暮らしにフェーズフリー」
 - ⑩12.11/《未来》「森の防波堤をデザインする」
 - ⑪4.11/《過現未》「過現未による防災対策」まとめ
- ②~⑩は大原文化センターで実施。

この開催日程からわかるように過去/現在/未来の三つの時系列区分で、それぞれ3回ずつ繰り返し行った。この行事により市役所にフェーズフリーの概念の定着と、津波対策として森の防波堤の概念を普及させることにした。ところで、学生会館の発会式には、いすみ市長から丁寧な挨拶文を頂いた。

今年2023年10月7日には、「いすみの未来学」として、古在豊樹・元学長と、千葉商科大学の現職の原科幸彦・学長、いすみ市の太田洋・市長を迎えた講座を開催した。この行事は、一般社団法人勝浦いすみ青年会議所の主催により、上総まちなか大学院は共催として実施し、筆者も企画と運営に係わった。

年間テーマ 過現未<過去・現在・未来>による防災対策
 上総まちなか大学院/開講 <http://www.kofuza.com/html/act.html>

① 3.11/《過現未》キックオフ・イベント②大東海灯台広場 ③ 4.11/過去から学ぶ・究極の安全&防災対策とは？！ ④ 5.11/《現在》「フェーズフリーとは？」 ⑤ 6.11/《未来》「森の防波堤が守ってくれる」 ⑥ 7.11/《過去》「展望室&FM周付き発電風車」 ⑦ 8.11/《現在》「フェーズフリーと防災食」 ⑧ 9.11/《未来》「森の防波堤の可能性 (FS)」 ⑨ 10.11/《過去》「洋上風力発電と産業の10次化」 ⑩ 11.11/《現在》身近な暮らしにフェーズフリー ⑪ 12.11/《未来》「森の防波堤をデザインする」

⑪ 4.30/《過現未》「過現未による防災対策」まとめ
 ◇日時 2022年4月30日(土) 13:30~16:00
 ◇会場 いずみ市役所大原文化センター-洗機座 (リアル定員25名)
 いずみ市大原 7838 TEL.0470-69-1222
<https://map.goo.ne.jp/place/6MFFFB-IA/map/> **参加費無料**

2011年3月11日以来、「過現未による防災対策」の課題として、安全&安心、フェーズフリー、森の防波堤、展望室&FM放送局、洋上風力&産業の10次化、ファストアラートなどについて取り上げ、身近な防災&暮らしと防災について、考えてきました。今回は、そのまとめとして、さらに今後の方向性を見出します。

【講座内容】
 ① 過現未による防災対策のキーワード (60分)
 (近代気候学・フェーズフリー・森の防波堤・ファストアラート・洋上風力・展望室&FM放送局・防災食開発・シルバードモコラシ)

② 千歳講義会でのフェーズフリーへの取組み (30分)
 ③ ディスカッション/講座before&after (60分)
 いずみモデル/洋上風力/森の防波堤/その他の具体化とは
 <中継の成る形を随時更新>

【目的】2021年は、東日本大震災の10年目にあたり、これを機会に、地震・津波、台風・集中豪雨、コロナ感染症・鳥インフルエンザなど《複合災害》について考える必要があります。それには、過去の出来事について復習・反省し、現在できることを行い、さらに未来に向かって準備し対策することが必要です。

「フェーズフリー」や「森の防波堤、そして「洋上風力発電」や「展望台付き風車」など、新しい話題があります。「上総まちなか大学院」は、それらを課題として、その解決への糸口を講師とともに考え実践し、安全安心で、持続可能な いずみ市 をみなさんとともにつくりたいと思います。

【主催】一般社団法人 洗機座 / 上総まちなか大学院 (フェーズフリーアクションパートナーメンバーAP021004)
【共催】 イベント・パンキング運営組織委員会
【協賛】 いたづら丸太工房・墨山風景(木村康志)、コスモ食品(株)、(株)光と風の研究所、一般社団法人 Tsunami
【後援】 いずみ市、千葉日報社、NPO 大東海燈台クラブ
【問合せ】 kofuza@gmail.com / 090-1268-5882 (佐藤 清彦)



大原文化センターへのアクセス: 所沢線 大原駅下車、徒歩約5分。アドレス: いずみ市大原7838




Fig. 3 Kazusa Downtown Graduate School

令和4年度 長野県地域発元気づくり支援金活用事業 **一般社団法人 洗機座**

《地域での防災食の普及》
 3回シリーズ/第1回目

とき: 2022.7.16(土)11:00~14:00
 ところ: エコールみよた/大会議室&調理室
 〒389-0207 長野県北佐久郡御代田町馬瀬口1901-1 TEL.0267-32-2770

7月の体験会 「フェーズフリーの防災食について」



講師/飯田和子 (栄養士、調理師、国際美術師)

〇防災を新しい「フェーズフリー」という概念から考えましょう。「フェーズフリー」は「バリアフリー」と同じように、いつもの日常時(=平常時)ともいふ非常時(=災害時)との間に《意識の差》(=ギャップ)をなくして、災害を切り抜けるようという「かっこいい」防災概念です。
 〇この元気づくり事業では、災害時における調理や食事について、日常時から「防災食」として蓄積づけることを目的にします。
 〇災害時でも元気を取り戻せる食事や「フェーズフリー」の概念を取り入れて、新しい「防災食」として、実際に調理し試して体験を通して学びます。
 〇住民のいのちと元気な暮らしを互いに支えあうことを、《地域が行う防災力の向上の取組》として体験し、地域に防災食として普及していきます。

〇スケジュール
 11:00 集合/開始&解説
 11:30 調理
 12:00 試食/講評-意見交換
 13:30 片付け/アンケート
 14:00 終了

参加費/500円 (お一人)

〇今後の予定:
 ・8月の体験会/8月20日(土)11:00~14:00
 「地元食材を活かした防災食について」
 ・9月の体験会/9月17日(土)10:00~14:00
 「災害時を想定した炊き出しを含む防災食について」

会場は御代田町ですが、近隣の市町村にお住いの方の参加も可能です。
 ※ご参加は、小学高学年(5年生~)以上とし、中学生や高校生の方も歓迎です。
 ※家族でのご参加も歓迎です。
 ※ただし、参加申込みや質問の場合には、早めに、下記連絡先まで、ご連絡ください。(参加定員40名)。

<https://www.eventbanking.com/bousaisiyoku>

主催/一般社団法人洗機座 (事務局) 軽井沢まちなか大学院
 Web: <http://www.kofuza.com/html/project.html>
 連絡先/Email:kofuza@gmail.com TEL:090-1268-5882 (佐藤)

協賛/御代田町教育委員会
 協力/NPO 法人まちなかの縁から
 TEL:080-6173-5421(佐藤)
 協力/フードバンクみよた

※ 洗機座は、防災地域こども応援プラットフォームの賛成団体です。

Fig. 4 KaruizawaDowntown Graduate School

(3)軽井沢まちなか大学院の取組 (図4)

◇軽井沢を地域とした地域づくり・文化ふるさと快活事業

第1部《朗読/体験談》2020.11.21日(土) @軽井沢書店

第2部《公開勉強会》2020.11.21日(土) @くっつけテラス/多目的室

◇令和4年度長野県地域発元気づくり支援金活用事業《地域での防災食の普及》

第1回「フェーズフリーの防災食について」2022.7.16(土)

第2回「地域食材を活かした防災食について」2022.8.20(土)

第3回「災害時を想定した炊き出しを含む防災食について」2022.9.17(土)

◇防災食を味わう『茨木のり子の献立帖』のメニューから 2022.11.17(金) 旧軽井沢公民館

(4)茨木のり子の朗読と音楽による社会課題への取組

2019年・・・江戸川区&鶴岡市友好連携企画/学童疎開75周年記念行事)

—茨木のり子の詩から知る平和と友好のきずな—2019.11.9(金) @江戸川区タワーホール船堀

2020年・・・「茨木のり子2020秋/怒るときと許すとき」2020.10.9(金) @東京ウイメンズプラザ

2021年・・・「茨木のり子2021冬/歳月」2021.12.22(水) @日仏文化協会汐留ホール

2022年・・・「日本語を味わう—茨木のり子の詩作を題材として」2022.11.6(日) @中軽井沢図書館

「茨木のり子2022秋/対話」2022.11.23日(水) 日比谷図書文化館小ホール

2023年・・・「茨木のり子&金澤翔子バースデー記念イベント」～いま二人の筆跡から学ぶこと～

2023.6.12(月) @ドームホール/北とぴあ

4. 未踏技術への取組

緒言に述べたように、科学技術は革新しかつ巨大化する。結果として、複雑しその担い手も大規模化する。その中で市場を席卷するのは政府や業界との関係が深いことが早道となる。その関係や弱いと、なかなか普及や発展が難しいという状況がある。この場合にも理想と現実のギャップが深まり、それが課題となる。現実を理想に近づけるのが課題解決へのアプローチであり、英語では課題はチャレンジ (challenge) という。こうして業界の主流となっていない未踏技術がある。有用と考えられる未踏技術の応援も「アドボカシー」といえる。将来、目の目を見るようにすることは、未来史としての視点である。筆者および筆者の組織が行っている多くの対象はそう言えるかもしれない。

ここで、そうした未踏技術の中で特に二つを紹介したい。それは水素吸蔵合金の「マグ水素」¹²⁾と、土木建築分野で適用されるバサルトファイバー¹³⁾である。前者は、政府や企業が進める液化水素による貯蔵と運搬に比べて格別に取り扱いが簡便でメリットがあるが、上述の背景があり認知が進んでいない¹²⁾。後者は、ロシアやウクライナ、そして中国などの経済圏から広まっているためか、国際関係が影響したかこれも普及が進んでいない。筆者と筆者の組織や団体、あるいはその有志は、利点を見出し普及への働きかけを行っている。バサルトファイバーについては、特に専門のバサルトファイバー研究所¹³⁾という一般社団法人を設立してその認知と普及のために事業活動を行っている。実際の適用や規格化を進めのために、アドボカシーと未来史づくりを行っている。

5. 結 言

本稿では、《アドボカシー》《未来史》《まちなか大学院》という三つの要素について取り上げ、その関係について述べた。これらは、社会のなかの、ヒト、モノ、コト、トキに直接的に関係しているが、そのもっとも重要なエフェクトは、課題解決である。時間の経過は速い。現在は直ちに過去になり、未来はすぐに現在になる。これらを《過現未》として一元的にとらえることは、今を大切に生きることへの刺激である。そのシゲキと取り組みを暮らしとともに見出すのが、わが《まちなか大学院》であるといいたい。

文 献

- (1) 佐藤建吉, “過現未を横断する「未来史」について”, [No.21-60] 日本機械学会技術と社会部門講演会 技術と社会の関連を巡って 過去から未来を訪ねる [2021.11.25-26, オンライン], <http://www.kofuza.com/images/miraishi2021.pdf> .
- (2) 佐藤建吉, “未来史解題”, [No.21-60] 日本機械学会技術と社会部門講演会 技術と社会の関連を巡って 過去から未来を訪ねる [2021.11.25-26, オンライン], <http://www.kofuza.com/images/miraishi2022.pdf>
- (3) 佐藤建吉, “未来史という視点”, 新エネルギー新聞第 160 号 (2020 年 6 月掲載), http://www.kofuza.com/images/nen_2020_34.pdf
- (4) 佐藤建吉, “過去から未来を訪ねる技術史という視座の定着のために”, C編 74 (746), 2344-2350, 2008, <https://cir.nii.ac.jp/crid/1390001206385887104>
- (5) 今道友信, “環境としての技術連関の一端(特別講演「技術連関の意味と今日的背景」”, 日本機械学会講演論文集 2007 (0), 155-156, 2007
- (6) 今道友信, “エコエティカ”, 講談社学術文庫, 1990.
- (7) 佐藤建吉, “「エコエティカ」は、現代社会で必須の倫理学”, 新エネルギー新聞, 第 52 号 (2016 年 5 月掲載), http://www.kofuza.com/images/nen_52.pdf
- (8) 佐藤建吉, “現代社会の環境倫理学「エコエティカ」”, 環境倫理の基礎講座(第 2 回), 環境管理, 第 52 巻 2 号, 55-59 (2021), http://www.kofuza.com/images/IMG_20210715_0002.pdf
- (9) 松井真理子, “市民社会のアドボカシーの論点整理”, 四日市大学論集第 30 巻第 1 号 (2017 年掲載), 119-132.
- (10) 洗楓座 HP, <http://www.kofuza.com/html/about.html>
- (11) 洗楓座 HP, まちなか大学院(2021), <http://www.kofuza.com/html/about.html>
- (12) バイオコーク技研株式会社 HP, <http://www.biocokelab.com/>
- (13) 一般社団法人バサルトファイバー研究所 HP, <https://www.bfl.jp.com/>